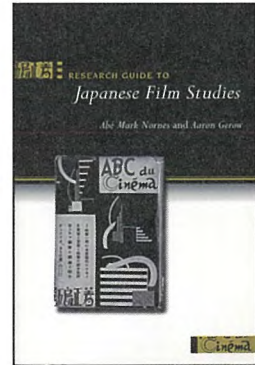


映画研究への招待——アーカイヴから批評的研究へ

Abé Mark Nornes, Aaron Gerow

RESEARCH GUIDE TO Japanese Film Studies



洞ヶ瀬 真人

ミシガン大学の日本研究センターから *Research Guide to Japanese Film Studies* が上梓されている。本書は90年代以降の国内外の日本映画研究をリードしてきたアーロン・ジェロー、阿部・マーク・ノーネス両氏による労作であり、彼らを主軸とした研究者たちのネットワーク Kinema Club の一つの成果である。日本映画研究者はもちろんのこと、日本文化に関連した研究を行っている研究者にも大いに役立つ内容になっており、ここに紹介したいと思う。英米圏では「スタディ・ガイド」といった名を冠した著作が数多く刊行されており、大半のものは各分野のディシプリンを概括する目的で構成されている。一見本書もタイトルから同類のものとして捉えられてしまうかもしれないが、手にして頂けば趣の違う書物であることがすぐわかる。本書の主題はそうしたディシプリンの提示ではなく、むしろタイトルの通り、日本映画に関する研究調査を行おうとしたときに、まず現時点でどのように行動したらいいのかの指針を提示する、より実践的なものである。体裁からは、日本映画関連のアーカイヴとライブラリー、及び文献書誌情報を記載した一種の参考図書のように見えるが、実際にはそれ以上の貴重な情報が盛り込まれている。

日本映画をアカデミックな研究対象として調査しようとすると、多少の困難を感じる人が多い。それは、日本では文献や歴史的な一次資料などについての情報の整理が途上であり、ライブラリーとして十分に整っているとは言えないからである。それゆえ、海外の研究者にとって日本映画の研究は、個々人が高度な日本語と交渉能力を身につけることによってそうした状況を乗り越えなければならないという高いハードルを抱えていた。情報整備・ライブラリー構築といった問題は、本来、どこ

よりもまず先に日本の大学・研究機関などが改善に乗り出さなければならないはずのものである。しかし、日本では、大学組織の未だ抱えている因習や採算を重視する文部科学省の政策の対象になりにくい事情などの下で、映画研究のような主題が社会的重要性を持っているにも関わらず軽視され、調査のための環境改善が期待できない状態が続いてきた。こうした厳しい研究環境に対し、二人の著者は自らの地道なフィールドワークから積み上げてきたそれぞれの経験と知識を提供することによって、少しでも多くの研究者が日本映画という題材に携われるようにボトムアップの環境改善を本書で図っている。どのような情報源を参照することによって歴史的資料にたどり着くことができるのか、どのようにすれば入手困難な映画作品に触れることができるのかなど、研究調査のための具体的方法に至るヒントが、惜しげもなくここに公開されている。

本書の構成を少し紹介してみよう。全体は6つの章立てから成っている。

1. 日本映画資料を中心とした世界各地のライブラリー
2. 映画作品の配給を扱う機関・業者
3. 日本映画関連書籍などを扱う古書店
4. 日本映画及びその他関連書籍
5. 日本映画関連の情報を集める上で重要なデータベース、ウェブサイト
6. FAQ: 研究調査を進める中でしばしば直面する疑問・問題へのコメント

内容はこのように日本映画関連の情報が主要部分を占めているが、一般的な参考図書とは異なり、機関や書籍の名前を即物的に提示するだけでなく、そうした情報一つ一つに著者自らの経験をもとにしたコメントが付されている。アーカイブとライブラリーを扱う最初の章では、日本だけでなく、世界各地の映画資料を収集している施設が紹介されており、それぞれについて連絡先やウェブアドレスをはじめ、詳細な情報が記されている。それは、2007年に映画史研究者・牧野守の膨大なコレクションを獲得したコロンビア大学のC. V. Starr East Asian Libraryから早稲田大学演劇博物館、日本の地方図書館、さらにはフランスのシネマテーク・フランセにまで及んでおり、各アーカイブの特徴や背景について丁寧な解説が付される。また、施設の収蔵書情報だけでなく、使い勝手や料金面の問題点、利用に際しての(所属大学図書館を通してなどの)事前連絡の必要の有無など、きめ細かい気配りの富んだ記述が一貫して見られる。例えば、東京国立近代美術館フィルムセンターの紹介では、日本政府が映画資料に長らく注意を払ってこなかったことに始まり、当センターの所蔵資料の土台となった御園京平のコレクション、その他の多数の協力者、近年の映画保存活動に加え、複製依頼や所蔵ビデオ鑑賞の料金設定から著作権問題に関することまでが記されている。こうした情報は、これまでは研究者自らが試行錯誤しながら入手していたものであり、これから調査に当たろうとしている研究者にとって本書はこの上なく便利なガイドブックとなるだろう。第2章は数頁ではあるものの、ソフト化されていないような映画作品を鑑賞したい場合に相談できる窓口を掲載しており、映画関連の古書店(専ら東京近辺の店舗に限られているもの)を紹介している第3章とともに、映画ファンや専門家の間で口コミでやりとりされているような「裏情報」の入手方法までも示唆している。

最も多くの頁数が割かれた、関連書誌情報を扱う第4章では、膨大な数にのぼる日本映画の書籍の中から重要なものを著者が厳選し、テーマによって分類、用途・内容について解説を加えながら一冊一冊を丁寧に紹介している。分類は、文献史、批評集、索引・目録、辞典類、シナリオ集、写真・ポスター・プログラム集、雑誌、検閲、映画史・社史・地方史など17のカテゴリーから成っている。厳選してはいるものの、それでもかなりの数の文

献書誌が取り上げており、初学者から専門的に調査したい研究者まで幅広い読者が参考にできるように工夫されている。

本書の全体的な印象でもあるが、膨大な情報量を扱っているながら、それらが漫然と列挙されるのではなく、各節ごとのテーマに沿って「重要なもの」と「その他のもの」という大まかな分類方法でコンパクトに整理されており、それでいてなおかつディシプリンや価値判断を押しつけるのではなく、読者が自分の興味に応じて主体的に研究行動を組み立てられるよう配慮された構成がなされており、秀逸に感じられる。取り上げられる情報も日本映画だけに特化せず、漫画、アニメ、テレビ、左翼運動など、関連する分野へも関心が広がるように気配りがなされており、映像文化さらには文化研究全般に関心をもつ読者に広く勧めたいと思わせるものとなっている。最後の章のFAQでは、フィルム媒体の貴重映像資料にどうアクセスするか、刊行する論文に図版として掲載したいスチル写真をどのように手に入れるかといった極めて実践的な疑問に対してまで丁寧な回答がなされており、著者たち自らの経験のなかで得てきた研究調査の“技”を惜しげ無く提供しているという印象を受ける。

このように、他分野の類書を見渡しても例を見ないような内容が本書には盛り込まれているのだが、こうしたプロジェクトを推し進め、研究者自らが環境改善を図っていくとする背景には、日本及び欧米のアカデミアにおける「日本映画」という主題に対する強い危機意識が感じられる。これは、映画研究者・吉本光宏が近年の論考で強く訴えてきた問題であり、本書もそれに協調する形で構想されている。吉本はある論文で、欧米では映画研究が既存の権威や制度に対する一種の異議申し立てとして登場し展開してきたのに対し、日本のアカデミアではそれが不在であったことを問題にしている。彼によれば、そのような状態であったのは、日本の大学制度の主たる目的が依然として国民国家的アイデンティティの構築と保持にあり、映画研究はそうしたところに利する点をもたないからこそ、重要視されてこなかったからである。著者の一人であるジェローは、本書でさらに、こうしたことが翻って、欧米の学問領域でも日本映画に十分な注意が払われない状況を招いてきたと指摘している。だからこそナショナル主義的なイデオロギーから距離を保ち、アカデミアが抱えている旧態依然としたディ

シプリンを問い直す超域的視点を確保するために映画研究が今日本で必要なのだというのが、吉本と歩調を合わせた著者たちの見解である。本書は、こうした既存のアカデミアの状況に抵抗する手段として日本映画研究を展開させようという意思に貫かれているのである。

残念ながらおそらく今のところ、日本の大学にはこのような急進的な映画研究を抱え込む余地はない。しかし、それゆえに本書の試みは非常に貴重なものとも思われる。それは、映画研究という場を確立するよりも、実践的に映画研究という主題に関わる多様な分野の人々を少しでも増やしていこうとする目論みが本書の随所に読み取れるからである。映画は20世紀以降の文化の多様な側面に影響を及ぼしており、日本の近代文化研究に携わる研究者であれば、おそらく誰もがそれぞれのテーマを映画と関連づけて考えてみることができるし、そうする必要性があるといっても過言ではない。映画研究者だけでなく様々な研究者に超域的視点から日本映画に関わって頂きたい。そのためにこそ本書をお薦めしたいと思う。洋書ではあるが決して難しい読解を要求するものではない。書棚に置いておけば必ず役に立つであろう。

ひとつ残念なのは、書籍の販路が限られていることである。管見では、購入のためにミシガン大学の日本研究センター (<http://www.umich.edu/~iinet/cjs/publications/ordering.html>) にメールで問い合わせるか、もしくは米国のアマゾン経由で発注する必要がある。

Abé Mark Nornes and Aaron Gerow

Research Guide to Japanese Film Studies

Ann Arbor : The Center for Japanese Studies, The University of Michigan, 2009.